

赤いマントと父ちゃん

成瀬富貴子

昭和三年、姉の鶴子は飛驒の山里で産声を上げた。物心ついた頃から父親の姿はなかった。父親は誰なのか何処にいるのか、聞けない雰囲気があった。母のキミと祖母のサトに守られて、大切に育てられた。

鶴子の家の前には、太い丸太の柵に囲まれた学校のグラウンド程の大きな広場があった。

そこで、飛驒牛を売買する市が年に二回開かれた。牛市のある日は、方々の村からトラックで牛がひっきりなしに運ばれた。早朝から牛の鳴き声が集落に響いた。村の子どもたちは小遣いをもらい競って市場に集まった。沢山の屋台が建ち並び、普段は口に出来ない綿菓子や珍しいおもちゃも売っていた。

「五万八千円から五万九千円……」

マイクのボリュームをいっぱい上げた競りの声が山々にこだました。競りを牛耳る信一は、背広に蝶ネクタイ、白い手袋にちよび髭、山高帽子をかぶり黒山の人々の視線を一手に集めていた。牛が競り落とされると、大きな拍手とどよめきが起きた。

牛が売れた人たちはコップ酒を手に、すき焼きやおでんを食べて一年の苦労を癒した。丹精込めて育てた牛を売り、大金を手にした哀しくもめでたい日であった。土産を買って帰る予定が、酔い潰れて泊まる人も多かった。

鶴子の家も、牛市のある日は、臨時の食堂兼宿泊所になった。大きな田舎家に、木綿布団をびっしり敷き詰め、五十人以上の男が雑魚寝をした。家族の寢床が無くなり、親戚に泊まることもあった。大人も子どもも村祭り以上にわくわくする行事だった。信一も、鶴子の家で昼食を取り酒を飲んだ。キミやサトはニコニコして接待していた。信一は、

「鶴子、いい子にしておったか？」

と茶封筒に入った小遣いをくれた。いつも帰りがけに鶴子を抱き上げて頬ずりした。

牛市の無いときも時々信一が来た。信一が来ると、キミはご馳走を作り遅くまで酌をしていた。サトが、決まって言った。

「お母さんは大事な話があるから、今日はおばあちゃんと寝るよ。」

強引に鶴子の手を引っぱり自分の部屋に寝かせた。鶴子は、信一が父さんではなにか、きつとそうだと思ったが口には出せなかった。

昭和九年、鶴子が六歳の時、母キミに婿が来て私達四人が生まれた。隣村の貧しい農家の三男、正直だった。当時は、「粉糠三合有れば婿に行くな」と言われるほど、婿の地位は低く、追い出された話もよく聞いた。正直は優しい人で、鶴子はすぐに「父ちゃん」と呼び始め、何処へでもついて歩いた。サトとキミは正直に少し気を遣っていた。十二月末には鶴子に弟が出来た。親戚一同もほっと安堵する家族が誕生した。

この鶴子一家に恐ろしい事件が起きた。吹雪の晩だった。暫く姿を見せなかった信一が囲炉裏の前であぐらをかいていた。酔っ払って赤い顔をして笑っていた。驚いて突っ立っている鶴子に、

「鶴子、おいで。重くなったか」

と手を引いて膝に入れ、抱きしめた。懐かしい匂いがした。気になって鶴子はきいた。

「鶴子の父ちゃんは？」

祖母のサトが言った。

「父ちゃんは、用事で今夜は帰らんよ」

その時、突然玄関が開いて帰らない予定の父ちゃんが酔っ払って帰って来た。

「こりゃ、どういうこっちゃ？」

搾り出すような父ちゃんの声は、だんだん大きくなり尖った。信一は裏口から裸足で逃げた。キミとサトは真っ青になり、物置の内側から鍵を掛けてわなわたと震えていたという。鶴子は泣き止まぬ赤ん坊の弟を赤いマントに包み外へ逃げた。家の中からは父ちゃんの怒鳴り声と裸電球や茶碗を叩き割る音が響いた。家には帰れない。親戚にも行けない。そう思った鶴子はマントの中の赤ん坊を抱いたまま神社

へ逃げた。鶴子は、拝殿の隅に隠れ、寒さと恐さに震えていた。暫くすると、吹雪が止み弟の秀は泣き疲れて眠ってしまった。遠くの方から、

「鶴子ー。何処に居る。鶴子ー」

と呼ぶ父ちゃんの声が聞こえた。父ちゃんは秀を懐に入れて、鶴子にマントを着せた。

「もう心配するな。父ちゃんがついておる」

その声を聞き鶴子は号泣した。この日の出来事が鶴子の心を決めた。私の父ちゃんはこの人だけ、信一には二度と会わないと。こそこそと逢いに来て裏口から逃げるような人は父ではない。大好きな父ちゃんを裏切り、悲しませた祖母と母も許せないと思った。

鶴子の成績は、小学校から女学校まで抜群だった。父ちゃんは鶴子を溺愛し参観日は仕事を休んでも顔を出した。一年生の参観日の日、待ちかねた父ちゃんの姿を見た鶴子は、

「父ちゃん、鶴子、国語も算数も一等やったよ。廊下に習字も張り出してあるよ」と大きな声で言った。授業は中断し、教室は温かい笑い声でいっぱいになった。

鶴子は父ちゃんの喜ぶ顔が見たくて、益々勉学に励んだ。女学校卒業後、薦められて、岐阜女子医学専門学校（現岐阜大学医学部）まで進んだ。村始まって以来の快挙だった。女学校までの鶴子のライバルは村長の娘だった。村長は、婿の父ちゃんをいつも下に見て馬鹿にしていた。その娘を寄せ付けぬ鶴子の成績と進路は、父ちゃんを小躍りさせて余るものがあつた。

鶴子は望まれて、高山市の商家に嫁いだ。牧場を持つ大きな飛騨牛の店だった。結婚式は夫の弟と同時に、盛大に行われた。弟嫁は名の知れた財産家の娘であった。その父は結婚式の席でそっくり返り、

「わしは、こんな商売屋へ娘を嫁がせたくはなかったのにー」

と言った。鶴子の父は

「こんな良いご縁はございません。家族、親戚一同大変喜んでいます」

と言った。使用人の一人一人にお酌をして廻る父ちゃんの姿を見て、鶴子は声を殺して泣いた。美容師さんに、化粧が崩れるとたしなめられた。

婚家では、兄弟や小姑たちとの人間関係、財産争い、夫の女性問題と暴力など苦

労が絶えなかった。それでも父ちゃんには一切話さなかった。そんなある日、父ちゃんは鶴子を街の大きな店に呼び出した。

「鶴子の一番好きな人形を買ってやるぞ」

そう言うてにこつと笑った。何があっても明るく振舞っていたのに、父ちゃんは全部分かっていたのか……。鶴子は、思い出すたび涙が止まらなかった。

実父の信一は市会議員を何期も務めた地域の功労者だった。信一には、鶴子のよいうな子が何人もいたと聞いた。「私は好色男の蒔いた一粒なのか？」と自嘲したこともあった。

大好きな父ちゃんは五十七歳で逝った。数年して信一も逝った。その葬儀に行き、逢うことを避けてきた実父に別れを告げて来た。

赤い羊毛のマントが残った。小学校に入学する頃、父ちゃんに買ってもらった。村長の娘だけが持っていた赤いマントが欲しかった。鶴子のやんちゃに負けた父ちゃんは、日が落ちてから街へ行って買って来てくれた。恐い事件の時、赤ん坊だった弟を吹雪から守ったマント。我が子以上に鶴子を愛おしみ、大切にしてくれた父ちゃんの形見のマント。

八十四歳になった姉の鶴子は、夫の暴力から視力まで失った。

「私が逝く時は、このマントを掛けてね」

訪問する度に、私の方へ手を泳がせ頼む。

「うん。わかってるよ」

私はその手を握り返す。

姉の脳裏には、「鶴子ー、こっちこっち」と呼ぶ父ちゃんが居るのだろうか。姉の手は、童女のように軟らかくて温かいのである。